

外国人留学生と大学生の大学運動部への 参加動機に関する調査研究

A Study on Foreign Students and university students motives for
participation in University athletic clubs

桑野裕文

1. はじめに

大学課外活動であるところの大学運動部活動者の減少傾向が一向に歯止めがかからない今日、学生時代の課外活動における運動部活動には心理的・社会的・身体的恩恵があり、学生生活のクオリティを高める一助になるとの立場より、大学課外活動の運動サークル活動に関する数多くの研究がある。これら先行研究は大きく2つに分類できる。一つは、「運動部離れと同好会志向の解明」に関する研究である。研究には、「運動部へのイメージと入部意図」¹⁾、「スポーツの価値意識と入部意識」²⁾などがあり、運動部の勝利至上主義や、長い練習時間に伴う自由時間確保の困難さなどが、運動部離れの原因と報告している。さらに、「運動部活動への参加者の減少は各競技会の衰退を意味し憂慮する問題ではあるが、一方、任意の同好会・愛好会のスポーツサークル活動の活性化は大学保健体育の立場からすれば問題なのかもしれない」とも報告している。³⁾ もう一つは、「運動部活動における継続・退部」に関する研究で、「運動部

活動とアルバイトの両立」に関する報告が多い。さらに、運動部の継続を「高校から大学へスポーツのキャリアパターン」^{4,5)}として捉え、学内活動（運動部・文化部・無所属）と大学外活動の両面から検討がなされ、「学生が学生仲間の集団にとどまらず、地域の一員として活動することは喜ばしい」と報告している。以上これらの先行研究は、日本国籍を有する学生を調査対象とした調査研究の域を脱していなかった。

一方、留学生が増加傾向にある今日⁶⁾、視点を大学内から大学外に向けると、中央教育審議会に対し諮問「中長期的な大学教育の在り方について」がなされ、大学分科会において、その具体的な検討がなされている。そして、「中長期的な大学教育の在り方」の報告書⁷⁾の中に、「大学教育の質保証への取り組みは、大学のグローバル化の観点からも重要」とある。この「大学教育のグローバル化」は大学の国際競争力向上のための方策及び留学生対策の具現化を意味するものと思われる。さらに最近、大学の役割として、研究・教育にとどまらず、広く社会・地域貢献を求められている。

このように大学を取り巻く環境（社会が求め

る大学、学生が求めるサークル)が確実に変化している今日、留学生、大学外クラブ所属者、大学運動部、無所属の学生を対象に、スポーツの活動歴、実施度、参加タイプ、ソーシャルサポートの存在、生活感、バリア感についてアンケート調査を実施し、その現状把握に努めた。

2. 方法

(1) 調査対象

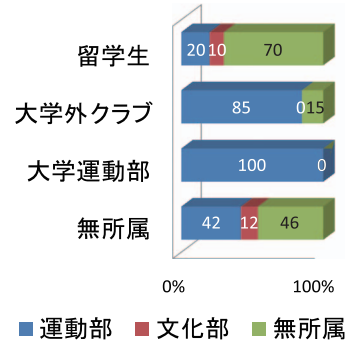
| | | |
|--------|------|-----------------|
| 留学生 | 200名 | 回収 (150名、75.0%) |
| 大学外クラブ | 150名 | 回収 (100名、66.7%) |
| 運動部 | 110名 | 回収 (100名、90.9%) |
| 無所属 | 200名 | 回収 (150名、75.0%) |

(2) 調査項目⁸⁾

大学生の入学前までの運動クラブ経験の有無
過去の経験は現在の行動を規定する
現在の運動実施度
実施タイプ
重要度
社会環境 (ソーシャルサポートの存在)
学生生活観
バリア感
主観的規範

3. 結果とその考察

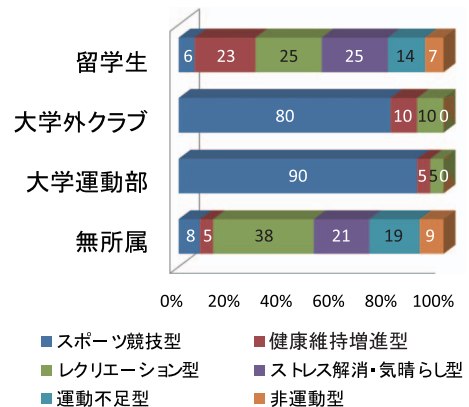
(1) 高校時代の部活動は何か [活動歴]



大学運動部所属者は、全員高校時代運動部経験者である。大学外クラブ所属者は、85%が高校運動部経験者で、文化部経験者はいなかった。
留学生は、運動部20%、文化部10%、無所属70%。留学生の国別では、中国(60%)、韓国(20%)、モンゴル、他。
九体連報告
・現運動部で高校運動部経験者は、男子68.9%、女子44%。

図1 高校時代の部活動

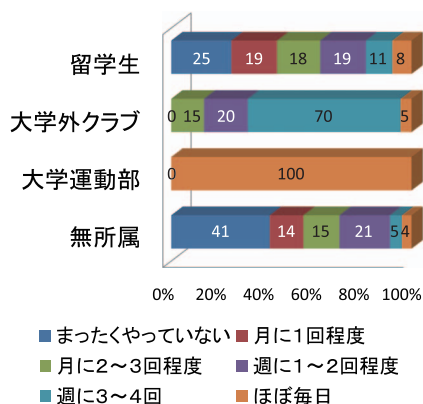
(2) 運動やスポーツを行うタイプとしてどれに最もあてはまりますか [参加タイプ]



大学運動部・大学外クラブは、スポーツ競技型志向。
無所属は、スポーツ競技型は少なく、レクリエーション、ストレス気晴らし型が多い。
留学生は、ストレス解消気晴らし型、レクリエーション型、健康維持増進型が多い。

図2 運動・スポーツの実施タイプ

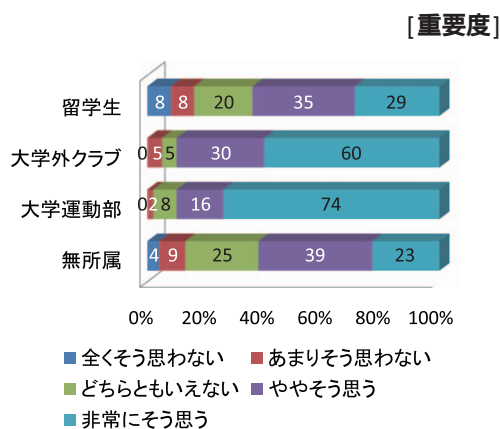
(3) - どのくらい運動やスポーツを行っていますか [実施度]



大学外クラブは、週3~4回であり、活動状況は、同好会・愛好会より、大学運動部に近い。無所属の41%の学生は、運動・スポーツを実施していない。

図3 運動・スポーツの実施 (回数)

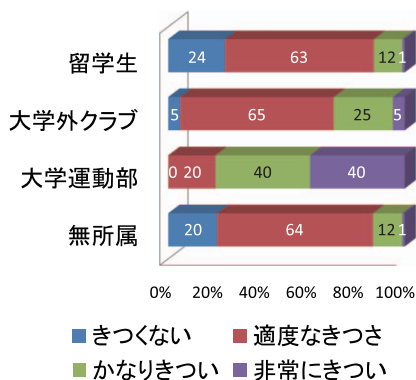
(4) あなた自身、運動・スポーツ活動を行うことは、学生生活に重要と重要ですか [重要度]



留学生 (64%)・無所属 (62%) の学生が、運動・スポーツの重要性を認めている。

図5 運動・スポーツの重要度

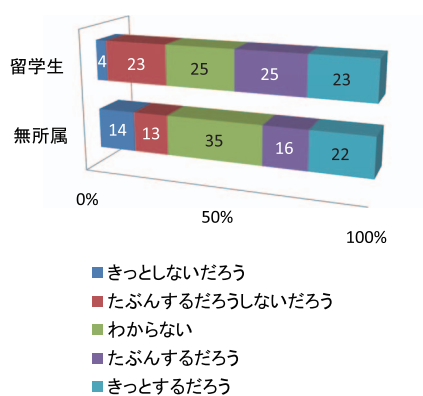
(3) - その運動はどのくらいの強度ですか [実施度]



大学外クラブは、適度なきつさが65%。大学運動部は、非常にきつい140%、かなりきつい140%、計80%。

図4 運動・スポーツの実施 (回数)

(5) あなたはこれから1ヶ月以内に運動・スポーツすると思いますか [行動意図]

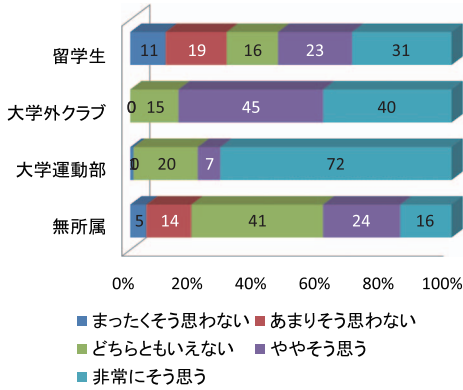


留学生 (64%)・無所属 (62%) の学生が、「学生生活に運動・スポーツ活動の重要性を感じている」にもかかわらず、「1ヶ月以内運動・スポーツにしたいと思いますか」が留学生 (48%)・無所属 (38%) に減少している。

図6 運動・スポーツ (行動意図)

(6) - あなたの家族は、あなたが運動やスポーツ活動をすべきだと思っていますか

[主観的規範]

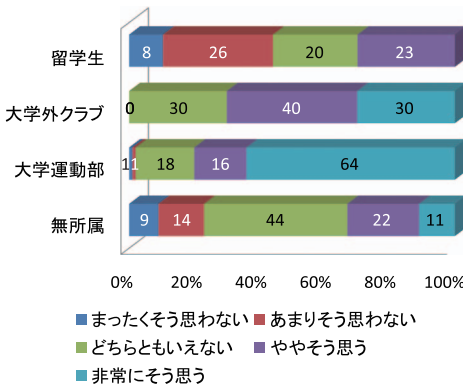


大学運動部では、全くそう思わない、あまりそう思わないが0%であり、家族の賛同が得られなければ、入部・活動が困難であることを示唆している。大学外クラブと大学運動部は、同じ傾向にある。

図7 家族は運動・スポーツをすべきと思っていますか

(6) - あなたの親友はあなたが運動やスポーツ活動をすべきだと思っていますか

[主観的規範]

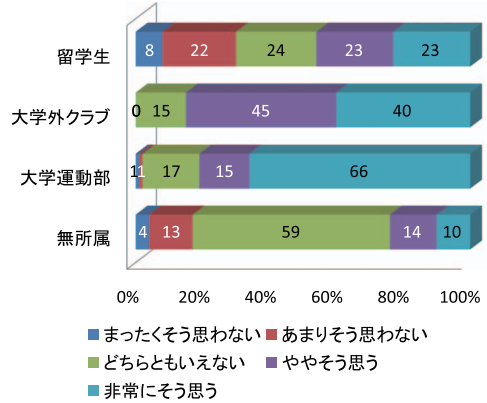


(家族)と同じ傾向。

図8 親友は運動・スポーツをすべきと思っていますか

(6) - あなたの先輩・後輩はあなたが運動やスポーツ活動をすべきだと思っていますか

[主観的規範]

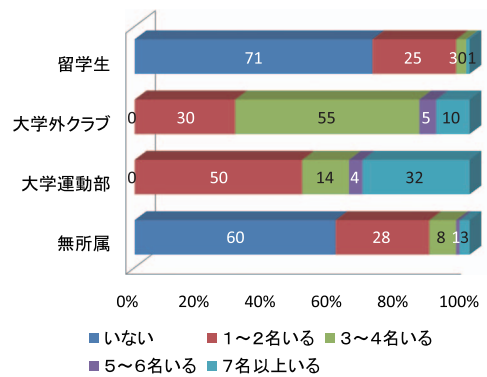


(家族)・(親友)と同じ傾向。

図9 先輩・後輩はスポーツをすべきと思っていますか

(7) - 運動やスポーツするとき、指導してくれる人がある

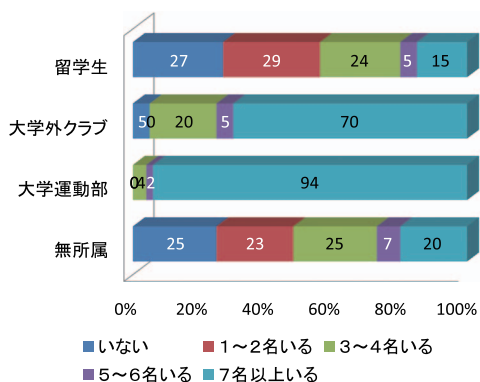
[社会的環境・ソーシャルサポートの存在]



留学生 (71%)・無所属 (60%) の学生が「指導者がいない」と回答している。

図10 運動・スポーツするとき指導者の有無

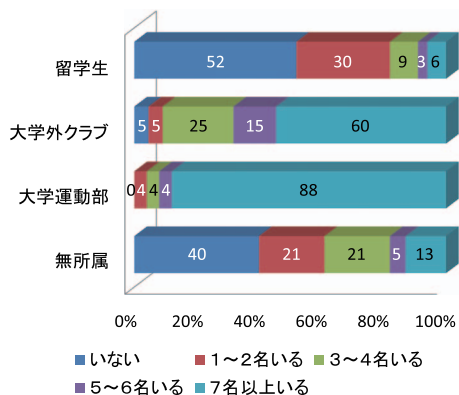
(7) - 運動やスポーツの話題をする仲間がいる
[社会的環境・ソーシャルサポートの存在]



留学生 (27%)・無所属 (25%) の学生が、「運動・スポーツの話題をする仲間がいない」と回答している。

図11 運動・スポーツの話題をする仲間の有無

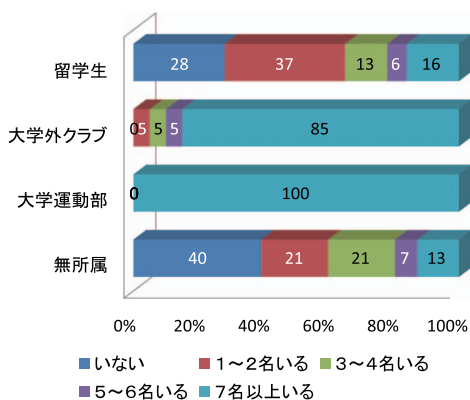
(7) - 運動やスポーツをすることを励ましてくれる人がいる
[社会環境・ソーシャルサポートの存在]



留学生 (52%)・無所属 (40%) の学生が、「運動・スポーツをすることを励ましてくれる人がいない」と回答している。

図13 運動・スポーツをすることを励ましてくれる仲間の有無

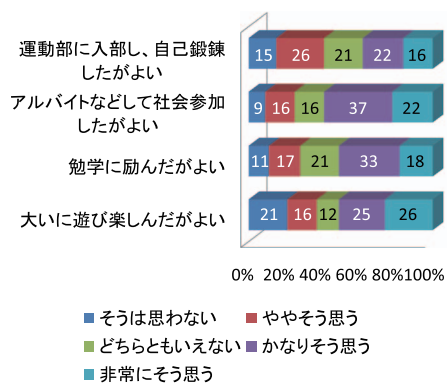
(7) - 一緒に運動やスポーツする仲間がいる
[社会環境・ソーシャルサポートの存在]



留学生 (28%)・無所属 (40%) の学生が、運動・スポーツする仲間がいないと回答している。

図12 一緒に運動・スポーツする仲間の有無

(8) - あなたはどのように思いますか (留学生への質問)
[学生生活感]

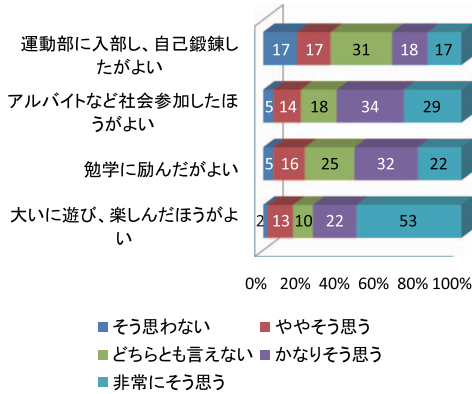


留学生にとってアルバイトは、非常にそう思う (22%)、かなりそう思う (37%) と高い。

図14 学生生活感 (留学生)

(8) - あなたはどのように思いますか (大学外クラブ所属者への質問)

[学生生活感]

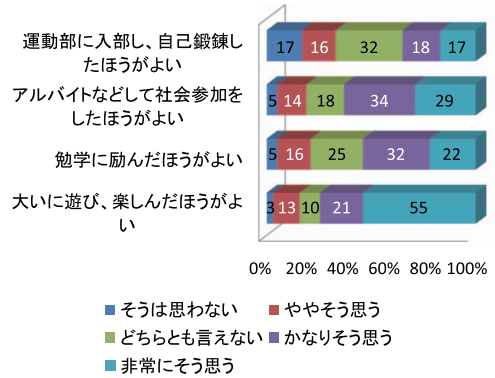


「大いに遊び、楽しんだほうがよい」と53%と回答している。他は同じ様なバラツキがある。

図15 学生生活観 (大学外クラブ所属者)

(8) - あなたはどのように思いますか (無所属者への質問)

[学生生活感]

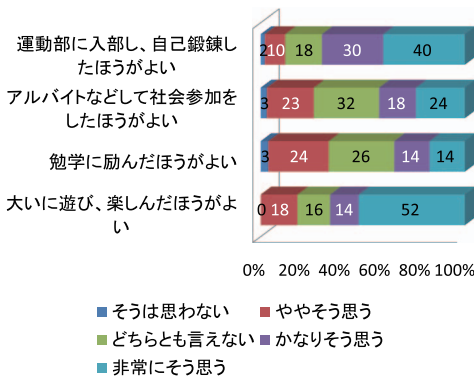


「大いに遊び、楽しんだほうがよい」と55%の学生が回答している。

図17 学生生活観 (無所属の学生)

(8) - あなたはどのように思いますか (大学運動部所属者への質問)

[学生生活感]

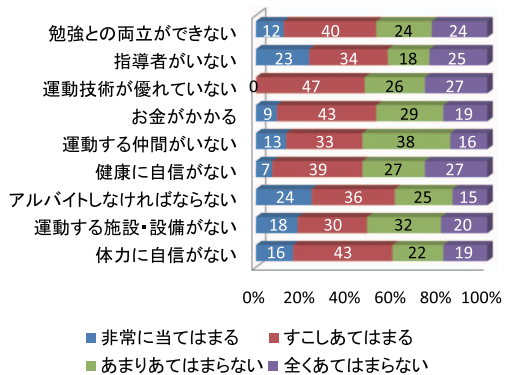


「大いに遊び、楽しんだほうがよい」と52%の学生が回答している。

図16 学生生活観 (大学運動部所属者)

(9) - 運動やスポーツをするとしたら、下記のバリアをどのくらい感じますか (留学生への質問)

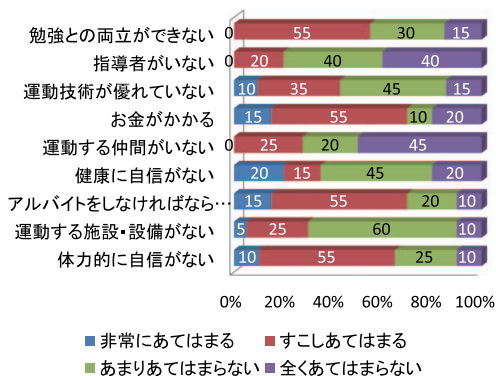
[バリア]



すべての項目で約50%。体力に自信がない非常に当てはまる (16%)、少し当てはまる (43%) 計59%。「アルバイトしなければならない」は、計50%。指導者がいない (67%)。九体連報告・地域のスポーツクラブに所属している学生のバリア感は低い。

図18 運動・スポーツを実施へのバリア (留学生)

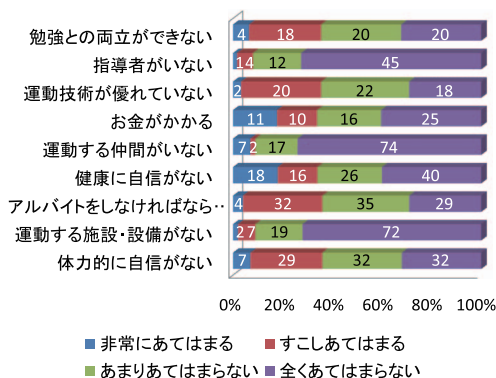
(9) - 運動やスポーツをするとしたら、下記のバリアをどのくらい感じますか（大学外クラブへの質問） [バリア]



大学外クラブと大学運動部の相違点は、お金（15% + 55% = 70% > 21%）と体力（10% + 55% = 65% > 36%。）

図19 運動・スポーツ実施へのバリア（大学外クラブ所属者）

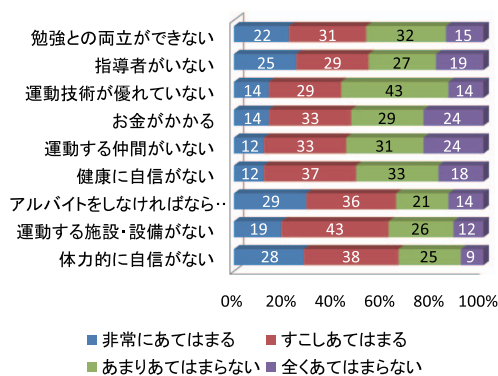
(9) - 運動やスポーツをするとしたら、下記のバリアをどのくらい感じますか（大学運動部への質問） [バリア]



すべての項目で非常に当てはまる・少し当てはまるの合計が50%以下。バリアが低い。九体連報告・バリア感が低かった。

図20 運動・スポーツ実施へのバリア（大学運動部）

(9) - 運動やスポーツをするとしたら、下記のバリアをどのくらい感じますか（無所属者への質問） [バリア]



運動・スポーツ実施へのバリアとして「体力的に自信がない」（66%）、「アルバイトをしなければならぬ」（65%）、「運動する施設・設備がない」（62%）と高い。

九体連報告・「体力に自信がない」が入部へのバリアと考えられる。

図21 運動・スポーツ実施へのバリア（無所属の学生）

4. 考察

(1) 留学生

バリア感以外の、調査項目（実施タイプ、参加タイプ、重要度、行動意図、学生生活感）に対する回答において均等化（バラツキ）傾向が認められた。この均等化（バラツキ）傾向は、無所属者（日本人）も同じであった。結果、今回の調査では、「バリア感」以外では、留学生と無所属者（日本人）と大きな相違点は認められなかった。

バリア感の「体力に自信がない」において、留学生が高い。

先行研究で「大学運動部・大学外クラブの所属者のアルバイト有無で約60～80%の学生が

有り」と回答、「アルバイトは規定要因とは認められない」との報告がある。今回も同様の結果である。しかし、バリア（非常にあてはまる、少し当てはまる）では、留学生60%、運動部36%と回答している。約半数の留学生にとってアルバイトは必要不可欠と思われる。主観的規範（親・親友・先輩後輩は運動・スポーツ活動すべきと思っているか）については、日本人無所属において、どちらともいえないが多く、留学生は均等化している。今回は、中国の留学生が6割を示し、日本の大学入学以前の運動歴では約2割の学生が運動部経験者と回答していた。今後、運動歴（部活活動歴、種目別、男女差）について調査してみたい。

(2) 大学外クラブ

今回の調査では、大学運動部と同傾向の結果を得た。

バリアの「指導者がいない」、「運動する施設・設備」について大学運動部は全く当てはまらないが85%、72%と高い。一方大学外クラブでは40%、10%と低く、予想された結果が得た。大学運動部において指導者、施設・設備において恵まれている（優遇されている）にもかかわらず運動部減少とは何が起因するのか。これまでもさまざまな視点より調査研究が行われているが、その解決策を見いだせないのが現状である。

先行研究で「大学運動部・大学外クラブの所属者のアルバイト有無で約60～80%の学生が有り」と回答、「アルバイトは規定要因とは認められない」との報告がある。今回も同様の結果である。ただしバリア（非常にあてはまる、少し当てはまる）では大学外クラブ70

%、運動部36%と回答している。留学生にとってアルバイトの必要性（生活資金の確保）といえるが、日本人学生のアルバイト実施についてはさらなる調査が必要といえる。

5. まとめ

大学生のスポーツ志向としての「同好会・スポーツクラブ志向・台頭」は大学スポーツの発展の観点より喜ばしいことではある。また、大学の使命として、研究、教育、社会・地域貢献があげられる今日、学生が大学内だけでとどまることなく広く地域社会に溶け込み、地域クラブ員として活動することは喜ばしいことである。しかしながら、「大学運動部」の衰退は、さびしくあり、憂慮する。今回は、増え続ける留学生を取り上げてみた。留学生については、最近の調査研究の中に「大学入学以前の体育・スポーツ経験に関する調査研究」⁹⁾がある。しかし、入学後に関する研究は少ない。大学を取り巻く大学生全入、入学希望者数の減、入学希望者の多様化、グローバル化の時代、各大学は生き残りをかけて留学生を確保するという傾向はしばらく続きそうである。今後、留学生対策・福利厚生への取り組みは重要である（メンタルヘルスの低下、コミュニケーションスキル、指導サポート・尊重・評価サポートの時期と享受、等）。

注

- 1) 「部活動イメージは異なり～（略）～拘束され、不自由で、陰気で、親しみにくいとい

うネガティブなイメージを持っており～」、
本田勝義、橋本公雄、本田由紀子、2003年、
第15巻第1号、九州スポーツ心理学研究、
P47 48

- 2) 「運動部、サークルが、無所属よりも運動・
スポーツへの個人的恩恵(喜び・楽しみ、ス
ポーツの価値、達成感)に対する価値観が高
いことがわかった」、藤原大樹、村上雅彦、
2005年 九州体育・スポーツ学会 P39
- 3) 大学新入生の運動・スポーツに対する意識
と行動——運動部活動離れと同好会・愛好
会志向の解明——、2009年、九州地区大学体
育連合、平成20年度研究プロジェクト報告書
- 4) 「結果予期(自分がその行動を実行した場
合どのような結果がえられるかという予想)
より有能感(自分がその行動をどの程度効果
的に実行できているかという自信を効
力予期と呼び有能感とほぼ同じ意味を持つ)
がスポーツキャリアパターンと密接な関係が
ある」、筒井清次郎、杉原隆、加賀秀夫、石
井源信計、深見和男、杉山哲司、1996年、体
育科学40、P359 370
- 5) 「スポーツ・キャリアパターンとは筒井
(1996)らによって同一種目継続型、異種目
継続型、中断復帰型、離脱型および不参加型
に分類されたものであり、時系列的な参加状
況としてのスポーツ・キャリアパターンは、
最も基本的なスポーツとのかかわりであると
考えられる」、2009年、第21巻第1号、九州
スポーツ心理学研究、P56 57
- 6) 留学生数の推移と留学生施策
2001～2003年 文部科学省「留学生調査」
より
2004～2007年 独立行政法人日本学生支援
機構(JASSO)より

学生の推移

- ・増加傾向にある
- ・平成10年度(51,298人)、平成19年度
(118,498人)

留学生施策

- ・昭和58年「留学生受け入れ10万人計画」、
平成20年7月「留学生30万人計画」骨子
策

外国人留学生に対する支援措置

- ・国費留学生制度、授業料減免措置を講じ
た学校法人への支援、他

福岡県・九州の留学生数

- ・ここ数年、福岡県では留学生数が年々着
実に増加しており、留学生数は東京・大
阪に次いで3番目である。内訳は中国か
らの留学生が約76%と最も多く、続いて
韓国、台湾の順となっている。出身国・
地域では全部で83ヶ国となっている。
- ・比率では、学部生では約1～2%、院生
では約10～20%となっている。
- ・全国大学における留学生受け入れ数は、
立命館アジア太平洋大学が3番目(1884
人)、九州大学が9番目(1292人)となっ
ている。

7) 諮問事項と諮問事項に関する審議の概要

- ・諮問事項の主な内容は、以下の3つからなっ
ており留学生についてはその③の中にふれ
られている。
 - (1) 社会や学生からの多様なニーズに対応
する大学制度及びその教育の在り方につ
いて
 - (2) グローバル化の進展の中での大学教育
の在り方
 - (3) 人口減少期における我が国の全体像に
ついて

大学教育の量的規模

量的規模については、留学生、社会人など多様な年齢層の者の受け入れ見込

- 8) 調査項目は橋本公雄らの作成した調査用紙を参考に一部加筆した。体育系運動部離れ現象の解明とその対策に関する研究 (2) 報告書、2004年九州地区大学体育
- 9) 出雲輝彦、木幡日出男、川北準人らは、出身地・国 (主に中国、韓国、台湾) の留学生を対象に「中等教育期における体育・スポーツ経験に関するアンケート調査」を2008年に実施 (調査内容、体育の授業で経験した運動種目、体育の授業以外で経験した運動種目等)、2009年3月に社団法人全国大学体育連合「大学体育学」で発表している。

<参考文献>

山崎多瑛・坂本瑞貴・谷川知士・徳島了・山本勝昭、2009年、「スポーツ・キャリアパターンを規定する心理社会的要因」、九州スポーツ心理学研究第21巻第1号 P56-57

山本教人、1990年、「大学運動部への参加同期に関する正選手と補欠選手の比較」、体育学研究第35、P109-119

土屋裕睦・中込四郎、「大学新入運動部員をめぐるソーシャル・サポートの縦断的検討」、体育学研究、P355-361

横田国俊、「運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動」、2002年、体育学研究第47、P427-437

内海和雄、2001年、部活動改革、不昧堂出版